様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　９ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ００３７０

研究課題名（和文）シェイクスピア戯曲の二つ折り本（第１版から第４版まで）の研究

研究課題名（英文）Studies on Shakespeare's Folios

研究代表者
桑山　智成（Kuwayama, Tomonari）

京都大学・人間・環境学研究科・教授

研究者番号：４０３８８０６２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：初のシェイクスピア戯曲集第1-4版（F1-4）の編集や出版の一端を明らかにし、版の異同と作品解釈との関係も考察した。例えばF2編集にはシェイクスピアをより賞賛する一方で編集者自身の詩作行為も含む二律背反性があることや、現在も採用されるF2校訂への再考の必要性を指摘した。従来、不明であったF4印刷業者については、出版物の損傷活字の調査を通して特定に成功し、F1, F2, F4印刷業者の関連についても指摘した。さらに『ウィンザーの陽気な女房たち』の初期版本間の特定の異句が西洋古典的な変身のイングランド的変容を示す等、テクストの異同から新たな解釈の可能性を示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
これまで注目されることの少なかった戯曲集第2版以降の編集や出版状況の一端を明らかにしたことには、書誌学そしてシェイクスピアの受容史上の意義がある。特にF4印刷業者の特定は大きな成果だといえる。また、F2の校訂の有効性を吟味したことは現代の編集テクストへの、特に日本においては翻訳テクストへの影響がある。一方でF1やそれ以前の版本の異句についてはそれぞれに解釈が成立し得る例を示したことで、シェイクスピア作品の多面的理解を促進することができた。また、これらの成果を、Zoomセミナーを通して国際的に発信し、今後の共同研究等の基盤を構築したことの意義も大きい。

研究成果の概要（英文）：This research project shed light on aspects of the editing and publication process of Shakespeare's first four complete works (F1-4) that have not received due attention, and delved into the impact of edition variants on the interpretation of the plays. It drew attention to the conflicting nature of F2, which praises Shakespeare further but also incorporates the editor's own prosodic inventions, and called for a reconsideration of F2's revisions that are still adopted today. The project also identified the previously unknown printer of F4 by examining damaged types found in contemporary literary publications, and pointed out an unrecognized connection among the publishers and printers of F1, F2 and F4. Furthermore, the research suggested possibilities of new interpretations by demonstrating that respective variants of the early editions of The Merry Wives of Windsor echo the localization of the Western classical theme of 'metamorphosis'.

研究分野：イギリス演劇

キーワード：文献学　文学　演劇学　シェイクスピア

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

シェイクスピアが 1616 年に没した後、1623 年に戯曲全集第１版が二つ折り本（F1）として初めて出版され、その後、同じ二つ折り本の形態で 1632 年（F2）、1663/64 年（F3）、1685 年（F4）と版を重ねた。F1 については、この作家の最初の戯曲集としてこれまで数多くの研究がなされてきたが、F2、F3、F4 は校訂上の誤りの多い F1 の再版として捉えられるのみであり、F1 との関係も含め、研究者の関心を集めることは極めて少なかった。初期版本の異文版（The New Variorum Edition of Shakespeare）編集に関わった Matthew W. Black と Matthias Shaaber が、各二つ折り版の本文校合結果の主な例を収録した共著 *Shakespeare's Seventeenth-Century Editors 1632-1685* (1937 年) や、1950 年代の印刷者不明の F3 と F4 について装飾活字の所有者を部分的に推定した 1950 年代の研究以降、空白期間は 60 年余りに及んだ。特に F2 については、Black and Shaaber 以来､2016 年に日本シェイクスピア学会セミナー 'The Shakespeare Second Folio Revisited'（リーダー：住本規子。本科研の桑山、廣田、長瀬も発表を行った）で取り上げられたのが最初である。F2 を F1 の再版として捉える潮流から脱却し、固有の版として、その本文の生成を取り巻く環境や、現存コピーに残る書き込みを分析し、F2 の歴史性に関する研究の余地と必要性を示唆した当セミナーは、本研究課題の出発点である。

２．研究の目的

本研究全体の目的は、17 世紀に出版された初のシェイクスピア戯曲全集第１版～第４版（F1-F4）を、出版状況・編集方法・本文解釈・上演といった面から多角的に考察し、その特質に迫ることにある。具体的にはメンバーは以下のような狙いをもって進めた。

（桑山）F1-F4 の異同を比較し、それぞれの書籍としての独自性はどこに見られるのか、特に F2 が後世の編集にどのように影響を与えているのか、また F2-F4 に劇場上演の資料や要素が新たに含められた痕跡があるのか、といった問いを検討することに研究の主眼を置いた。

（廣田）本課題による研究以前から、『ハムレット』における Q1 (1603)、Q2 (1604-05)、F1 というそれぞれテクストとして正統性、権威を有する初期刊本相互の本文の異同と、これが戯曲解釈にもたらす問題に関心を有し、特に旅役者がハムレットに朗誦して聞かせるトロイ戦争を扱った戯曲の台詞において Q1 (E4), Q2 (F4)で 'mobled Queene' と呼ばれる王妃ヘキュバが F1 (Oo4v)では 'inobled Queen' とされていることに着目していたが、上記日本シェイクスピア協会セミナーでは、これらに併せて F2 (qq2v)における対応する行では 'Mobled Queene' に（再）改訂されていることを指摘することを得、それに伴い、この王妃の解釈が揺れ動いていることを考察した。本研究期間においては、これを基礎に、F3、F4 をも視野に収めつつ、初期刊本のテクストにおいて類似の事例を調査し、それらが戯曲解釈に持つ意義を探求することとした。

（長瀬）本課題申請当初、各版のテクスト校合に基づき、印刷所内で行われた印刷用テクスト編集の態様の一端を説明することを目指したが、そのためには各版の印刷原稿の伝達過程に関わった印刷・出版業者の特定と関係解明が不可欠であった。F1 と F2 には、出版に関係した印刷業者と書籍販売業者の名前が記録されているが、F3 と F4 には書籍販売業者の名前しかなく、印刷業者の特定が急がれた。印刷者の特定には膨大な時間を要する上、成功率も低いため、この半世紀間 17 世紀古版本の不明印刷者の特定は進んでいない。本課題においては、研究実績のある F2 と特に関係の深い F4 の印刷者特定を優先することとした。

３．研究の方法

（桑山）Arden Shakespeare, 3rd Series 単独版の F1-F4 に関する編集注を参照しながら、主にデータベース Early English Books Online、ウェブサイト Internet Shakespeare Editions に掲載のファクシミリ、明星大学のデータベース Meisei University Shakespeare Collection Database を使って異同箇所を検討した。特に Meisei University Shakespeare Collection Database に依拠した 36 作品の F1-F4 の異同リストを作成し、これを元に版本の独自性と関係性を考察した（F1-F4 の比較検討を進めるため、F3 より含められたいわゆる外典作品は対象にしなかった）。

（廣田）本研究の基盤となった『ハムレット』における初期刊本間の異同と、その戯曲解釈における意義への関心の出発点となったのは､1988 年の The Oxford Shakespeare, *The Complete Works* の出版により広く知られるようになった『リア王』 Q1 (1608)と F1、両テクストの問題である。さらに、The Arden Shakespeare, 3rd Series において『ハムレット』Q2 と Q1・F1 のテクストが二分冊で刊行される（2006）など、複数の初期刊本を有するシェイクスピアの戯曲テクストが多く刊行されるようになった。これらや関連する研究において蓄積された知見を基に本研究では、初期二つ折り本とそれ以前に主に四つ折本で出版されたテクストを有する戯曲を対象に、1）四つ折本と F1 とのテクスト本文の比較、2）初期二つ折り本同士の比較、を実施した。その際、京都大学図書館機構などを通じて閲覧できる電子テクストの他、明星大学図書館、British Library に赴き、所蔵する初期刊本を参照した。

（長瀬）1640 年代から 1660 年代にかけて英国文学成立の立役者となったハンフリー・モーズリー、ヘンリー・ヘリングマンといった出版者たちは、かつてベン・ジョンソンによって組織された文学サークルの中枢部にいた。彼らは王党派文士の作品を多く出版したため、協働する印

刷者も限定的であった。F4 の印刷者特定に際しては、出版を手掛けたヘリングマンの印刷出版業者ネットワークを洗い出し、関係のあった印刷業者が 1660 年から F4 の出版される 1685 年までに印刷した版本に使用された活字を追跡することで、F4 に使用された活字との同定を試みた。F4 の印刷者特定の拠り所としたのは、同定が比較的容易な傷のついた活字である。損傷活字同定に際しては、F4 をはじめ明星大学資料図書館所蔵の古版本を調査させていただいたほか、英米の稀覯図書館より提供いただいた活字の写真を使用した。

４．研究成果

本研究課題をまとめる成果発表の機会として、2023 年 3 月 29 日に Zoom において、国際セミナー "Exploring Shakespeare's Folios" を開催した。住本規子氏、Jean-Christophe Mayer 氏、John Jowett 氏といった世界を代表する書誌学者も招へいし、6 名が論考を発表し、互いの発表に関してディスカッションを行った。（なお、研究機関を通じて Mayer 氏には助言者・連携研究者として本科研に関わっていただき、本科研二年次末の定年退職に伴い、共同研究者から外れた住本氏にも継続的にご助言をいただいた。Zoom 研究会に幾度もご参加いただいたことに謝意を表したい。）

最終発表の各発表タイトルは以下の通りである。'Shakespeare's Early Readers' Reception, Appropriation and Transformation of Printed Paratexts (1600-1800)' (Jean-Christophe Mayer); 'The Shakespeare First Folio and the Protestant Moment' (John Jowett), 'Metamorphoses Transformed: Acclimatisation of Ovidian Transformation in *The Merry Wives of Windsor*' (Atsuhiko Hirota); 'F2's Approach to Shakespeare' (Tomonari Kuwayama); 'Uncorrected State of a Stage Direction in the Second Folio *Richard III* Act 3 Scene 1' (Noriko Sumimoto); 'The Unsigned Printer of the Shakespeare Fourth Folio (1685)' (Mariko Nagase).

50 名を超す聴衆には、金子雄司氏、Sonia Massai 氏など著名な書誌学研究者も参加しており、フロアとの活発な意見の交換も行った。本セミナーがシェイクスピア劇現代版編集における F2 見直しのきっかけとなるであろう兆候も見えた。世界的な研究動向と現代版編集に影響を与えた点でも本セミナーならびに本研究課題の成果は大きいと言える。桑山、廣田、長瀬はセミナーにおいて獲得した新たな知見を基に改訂した原稿の出版を目指している。3 名の発表内容は以下の通りである。

（桑山）改訂箇所の数や逸脱の幅において F3 と F4 を上回り、これらの版の基礎も作った F2 に焦点を当て、その独自性と現代の版への影響を考察した。F2-F4 に関する重要な先行研究である Black and Shaaber の著作はこれらの版を現代の編集との連続性という観点で分析したため、F2-F4 の、特に F2 の書籍としての性質を捉え切れていない。とりわけ Black and Shaaber が見逃しているのは、F2 の目指すテクスト像が、現代の（特に 1937 年時点での）編集のように、シェイクスピアの原稿の復元を想定しているわけではないということである。シェイクスピアの戯曲集をブランドとして再版する一方で、韻律が正しい箇所もわざわざそれを崩して語彙や文法を、F2 編集者から見てより「自然な」ものへと変更していることから、F2 編集にはシェイクスピアの文学性・文体に対する二律背反的な姿勢を見て取ることができる。

この点で、Black and Shaaber が検討していない、F1 の「序文」（Preliminary Section）に対する F2 の改訂にも注目が必要である。F2 は新たにこの箇所にシェイクスピアを称える 3 つの文章を掲載した頁を追加している。その一方で、それらをあたかもオリジナルの F1 に含められていたかのような（シェイクスピアと同世代の筆者が書いたかのような）、あるいは F1 の賛辞文と見分けがつかないタイトルや頁の並びで刷っている。F3 や F4 もこれらを引き継いだが、F4 に至ると、同じ頁に F1 のオリジナルと F2 の追加箇所が区別なく入り混じることになる。また、「目次」においても F2 編集者は戯曲集を格上げするかのように「悲劇」と銘打つ作品タイトルを増やし、たとえば悲喜劇『シンベリーン』を『シンベリーンの悲劇』としている。

F2 という書籍の正確性は慎重に捉えなければならないことを考えると、該当箇所が少なくなっているとはいえ、現代の版がいまだに、シェイクスピアが生きた時代の「権威ある」改訂として F2 を引き継いでいる台詞には再考が必要である。初の戯曲集再版である F2 には不思議な力がこもっているのは確かであるが、F1 や他の初期版本の言葉のままで解釈できる余地がまだ残されている。発表では具体例として『冬物語』の台詞を取り上げた。

（廣田）『ウィンザーの陽気な女房たち』におけるオウィディウス『変身物語』における「変身」の扱われ方に焦点を当て、この戯曲のプロットの中心となっている女房達によるフォルスタッフへの復讐の諸相と関連させながら、Q1 (1602), Q2 (1619)と F1 が幾分異なった方法でオウィディウス的変身をエリザベス朝のイングランドへと移植し、馴致させていることを考察した。具体的には、

1）Q1 におけるペイジ夫人の台詞 (B4v) に 'methomorphised' という奇妙な語が見られることに着目し、この語が Q2 の相当箇所では 'metaphorphosed' (B4v) と改訂されていることを指摘した。編者たちはこれらを 'metamorphosed' と改訂するのが通例であるが、それぞれの四つ折本の別の箇所 (G2v) では 'metamorphised' (Q1) / 'metamorphosed' (Q2) という「正しい」綴り（またはその異型）が見られることを根拠に、 ペイジ夫人の「間違い」がオウィディウス的変身の変容の一例として考察できる可能性を指摘した。

2）F1 の対応する箇所では『変身物語』で語られる挿話への言及が見られ、原文に登場する巨人たちが男であるのにもかかわらず、ペイジ夫人は 'giantess' と女性形を使っている。この点を、

この登場人物が、オウィディウス的な世界をやはり変容させようとしている一例として考えた。3）それぞれを、フォルスタッフを洗濯籠に押し込む、「魔女」とされる老女に変身させる、鹿の角を頭につけさせウィンザーの伝説的な森番に変身させる、という一連の復讐と関連させることで、オウィディウスが『変身物語』において繰り返し描く古典古代的、神話的変身を、エリザベス朝的、市民的な形へと変容させる試みの一環であると考えられることを指摘した。

（長瀬）上述した印刷出版業者と損傷活字の調査の結果、F4 の一部に使用された損傷活字が特定の印刷業者の手懸けた版本に繰り返し現れることがわかり、部分的にではあるが、F4 不明印刷者の特定に成功した。本成果については、上記の国際セミナーにおいて口頭発表を行い、今後論文を発表予定である。論文として未発表の状態であるため、損傷活字の同定に使用した版本や印刷出版業者ネットワークの具体的内容についての記述はここでは差し控えたい。

また、印刷出版業者ネットワークに関する調査の副産物として、少なくとも F1、F2、F4 の印刷業者が非常に密接な関係にあったこともわかった。F1 と F2 においては、師弟関係でもある印刷業者のウィリアム・ジャガードとトマス・コーツが出版の企画者としても大きな役割を担っていた。1996 年に、書誌学の権威であるピーター・ブレイニーが印刷者は単なる請負業者にすぎないと主張したことで、F1 出版を企画した印刷出版業者に関する議論は多少の混乱を見た。印刷業者と言っても、個々人によりそのキャリアは様々であり、ウィリアム・ジャガードの場合は、初期に書籍販売と出版業で財を成し、出版企画から印刷まで幅広く手掛ける印刷業者であった。ジャガードのキャリアと F1 出版については、*Shakespeare Journal*、ファースト・フォリオ 400 年記念特集において紹介する機会を頂いた。ここでは、F2 の印刷者であるトマス・コーツが F1 の印刷にも関与していた可能性についても指摘した。今後の課題としてその証拠の収集に当たりたい。F4 の印刷業者が F2 の印刷に関係した証拠は確認できたため、近い将来成果を発表する予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 長瀬真理子	４．巻 9
２．論文標題 「ウィリアム・ジャガードとシェイクスピア第1・二つ折り本 」	５．発行年 2023年
３．雑誌名 Shakespeare Journal（日本シェイクスピア協会）	６．最初と最後の頁 pp.18-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 桒山智成	４．巻 14
２．論文標題 「シェイクスピアと世界の終わり」（「アポカリプスの表象／表象のアポカリプス」内）	５．発行年 2020年
３．雑誌名 表象	６．最初と最後の頁 pp.30-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　2件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 廣田篤彦
２．発表標題 「フォールスタッフの活動域」
３．学会等名 第2回英国史劇研究会 2022年3月12日（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Atsuhiko Hirota
２．発表標題 Hamlet and the ‘mobled/inobled’ Queen
３．学会等名 The International Shakespeare Conference 2018（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Atsuhiko Hirota
２．発表標題 Shakespeare in/and Japan: A Historical Perspective
３．学会等名 Paul Valery University, ICRL（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 桒山智成
２．発表標題 「座付き作家シェイクスピアは『ハムレット』上演をいかに始めたか？」（セミナー「劇作家の仕事」内）
３．学会等名 第60回シェイクスピア学会（日本シェイクスピア協会）
４．発表年 2022年

〔図書〕　計1件

１．著者名 桒山智成	４．発行年 2023年
２．出版社 岩波書店	５．総ページ数 300
３．書名 『冬物語』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	住本　規子 (Sumimoto Noriko) (10247174)	明星大学・人文学部・教授 (32685)	2019年度末まで（定年退職による）

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	廣田　篤彦 (Hirota Atsuhiko) (40292718)	京都大学・文学研究科・教授 (14301)	
研究分担者	長瀬　真理子 (Nagase Mariko) (80636506)	九州工業大学・教養教育院・准教授 (17104)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会	開催年
Exploring Shakespeare's Folios	2023年～2023年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
フランス	National Centre for Scientific Research			